

自転車走行マナーの悪化メカニズム およびマナー向上対策に関する検討

日大生産工 鳥居塚 崇

1. はじめに

近年、マナーの悪化が目立っている。自転車利用者のマナー悪化もその1つである。自転車のマナー悪化防止に向けた対策はいくつかあるが（例えば街頭指導や啓発活動など）大きな成果が上がっていないのが現状である。それらの対策は場当たりの傾向が強く、マナー悪化の背景要因に着目していないためではないかと思われる。そこで本研究は、マナー悪化の背景要因に着目し、それに基づいた対策を検討することを目的とする。なお、自転車利用時のマナーとして、雨天時傘を差さないこと、二人乗りをしないこと、並列走行しないこと、夜間無灯火走行しないこと、一時停止では停止すること、信号無視しないこと、携帯電話を片手に走行しないこと、を取り上げ、違法駐輪については検討対象外とした。

2. 自転車利用マナーに関する現状調査

本研究は人口約5万人のある自治体で行い、町民600人、大学生400人、高校・高専生700人、中学生250人の自転車利用者を対象に、マナーを遵守しているかを問う質問紙調査を行った。その結果、それぞれ過半数がマナーを遵守していないという結果になった（図1）。そこでマナー違反者を対象に、マナー違反として取り上げている項目は法律にも抵触するというを知っているかどうかを質問したところ、どの年代についても、法令違反であるという認識のある利用者は半数にも満たなかった（図2）。

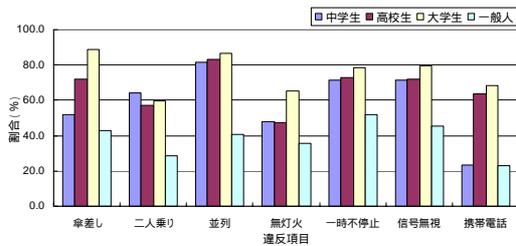


図1 マナーを遵守していない利用者の割合

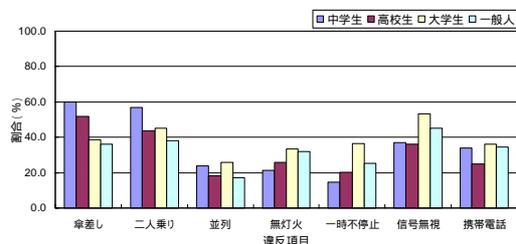


図2 マナー違反はすなわち法令違反と認識している利用者の割合

3. マナー違反は法令違反であることを広く知らしめるための対策の決定

そこで、マナー違反は即ち法令違反であり罰金を伴うこともあるということを利用者に知らしめることが第一歩と考えた。しかし、違反を認知させるための対策をたてたとしても、現状ではかなりの困難が待ち受けていると思われた。高校生・大学生を中心に若者は面倒くさいことを嫌がり楽をしたがる、また大人の言うことに耳を傾けない傾向にあるからである。本研究では、学生に対しても有効であろう対策について検討した。まず以下の3つの行列を作成した。なお点数化にあたっては、調査を行った自治体の関係者の意見を参考にした。

- A: 「年代」と「年代の特性」を点数化した行列
- B: 「対策」と「対策の特徴」を点数化した行列
- C: 「年代の特性」と「対策の特徴」との関わり合いを点数化した行列

年代の特性と対策の特性を表1に示すが、それらの年代と対策の特徴が点数化された行列 $L=AC$ を介して、年代別にどの対策が適当であるかが点数化された行列 $M=LB^{-1}$ を導いた（表2）。

これをみると、街頭指導（毎日）や取締りの強化、交通安全教室（強制）などが効果をあげる結果となっているが、現実問題として大掛かりすぎる対策である。その点、目の付く場所へのポスター貼りは、評価では次点であるものの、身近に行うことができる対策であり、違反者が多い高校生・大学生にもある程度効果的と考えられることから、この対策が違反認知度を上げるための手始めであると考えた。

表1 分析で用いた年代の特性と対策の特徴の一覧

	項目
年代の特性	素直、流行に敏感、周りの影響を受け易い、楽をしたがる、世間体を気にする自立している、社会に関心あり、有名人の影響を受け易い、法を守ろうとする
対策の特徴	無意識認知度、受動的認知度、受動的認知度、注目度、強制力 面倒くささ、簡単、効果速度、効果範囲(人数)

表2 行列 M: 年代別の対策

	目のつ(場所へのポスター貼り)	校内・町内放送	街頭指導(月1回)	街頭指導(毎日)	交通安全教室(強制)	交通安全教室(任意)	CM	取締りの強化(法の改正)
中学生	9	6	3	12	10	2	9	13
高校生	11	7	2	9	6	3	12	11
大学生	10	7	2	10	8	4	11	11
20代	8	6	3	12	10	3	9	13
30代	8	6	3	13	11	2	8	14
40代	8	6	3	13	11	2	9	14
50代-	8	6	3	13	12	1	9	14

4. 施策および効果の検証

自転車走行に関する法令および違反するとどのような罰則が与えられるかが記載されたポスターを作成し、調査対象である自治体における街頭掲示板、大型スーパーの掲示板、各種小売店の店頭、および各種学校に

A Study of the Mechanism of Getting Worse Manners of Bicycle Riders
And the Effective Measure to Make the Manners Better

TORIIZUKA Takashi

掲示した。このような施策3ヶ月後の法令認知率と、3ヶ月後および6ヶ月後の違反率を調査したところ図3および図4のようになった(紙幅の関係で二人乗り走行を例にとったが、他の法令に関しても同様であった)。なお、この調査も町民600人、大学生400人、高校・高専生700人、中学生250人の自転車利用者を対象とした。施策後には、過半数が「やってはいけないこと」であることを認識しており、また実際に違反する利用者も大きく減少している。よって、自転車利用のマナー違反は法令違反であり「やってはいけないこと」であるということを知らしめること、また自治体内の至るところおよび各種学校内に貼るポスターという方法をとったことの妥当性が示されたといえよう。

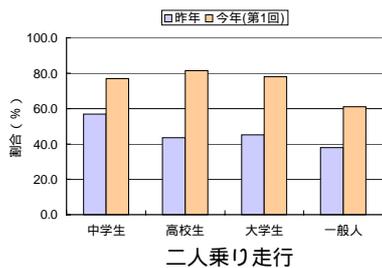


図3 法令違反であると認識している利用者 (右が3ヶ月後)

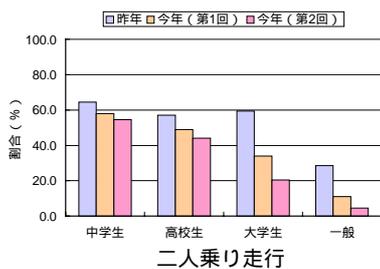


図3 違反している利用者 (施行前、3ヶ月後、6ヶ月後)

5. 依然として違反を続ける利用者の違反要因

違反者の減少は認められたものの、依然として違反者は利用者の2割を超えている現状があった。そこで、それらの違反者はなぜ違反をするのか、違反者を対象に質問紙調査を行った。調査対象者は、同様に町民、大学生、高校・高専生、中学生である。すると、違反の根底には大きく3つの要因が存在することが判った。すなわち、

面倒臭い、時間がない(時間があっても時間がない)

危ないと思わない(危険な目に遭ったことがない)

代替交通機関が存在しない、代替交通機関が高いの3要因である。このうち については対策が可能である。 については違反走行が危険であることを知らしめる機会を設けることで、また については代替交通機関を充実させることで解決できそうな問題である(実現可能性の高低は別の問題として)。ところが については解決案が簡単には見つからない。 起因して違反する利用者は、いわば「言ってもわからない人」だからである。

6. 社会的背景との結びつきに関する検討

そのような人々がなぜ増加したのかについて、社会的背景と結びつきがあるのではないかと考え、違反者とタイプA行動との相関性を検討した。タイプA行動

とは、競争的、野心的、精力的、機敏、セッカチ、多くの仕事に巻き込まれている等、ストレスの多い生活を送る人々の行動であり、いわば現代社会に染まっている人々の行動であるといえる。図5はタイプA行動を診断するテストの高得点者と低得点者が、各種の違反をする割合を示すものである。すると、高得点者すなわちタイプAの人々の違反率は、低得点者と比較して有意に高いことが判る。したがって、 のように感じる人々が増加したのは、社会的背景と結びつきがあることが判った(因みに他者のマナー違反に迷惑を感じる割合もタイプAの人々が有意に高く、自分は違反するが他人の違反は迷惑と回答した例が多数存在した)。しかし、現代社会が創り出した「言っても判らない人々」を相手に、どのように施策すればよいかを見出さなければ、マナー向上には結びつかない。現代社会がこのような人々を創り出すとすれば、この種の人々は、今後ますます増加すると見込まれるからである。

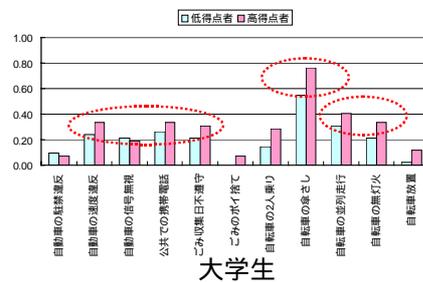


図3 高得点者(右)と低得点者(左)の違反率の比較
紙幅の都合で大学生を例に挙げたが他の年代もほぼ同様

7. 解決への糸口

脳は理性を支配し、大脳辺縁系は情動を支配するという、脳の機能に着目した。「言ってもわからない人々」は理性すなわち大脳に働きかけても効果は期待できない人々ということである。それならば辺縁系に働きかければ良いと考えた。すなわち情動に訴える対策を構築すればよいということである。そこで、大学生、高校生、自治体の担当者とのディスカッションで、情動に訴える対策案を検討した。すると、例えば、

天候に関係なく毎日指導員が街頭に立つ

指導員は利用者とのコミュニケーションを図る

TVのCMを利用したり著名人を招いて大々的にしかも継続的にキャンペーンを開催する

などのように、労力や金銭を伴うものが多かった。

は、指導員の努力や親しみやすさが利用者の感情に訴え、違反することがすまないという気にさせるもの、はそれだけ大々的な事業なのだから自分もやってみようという気にさせるもので、いずれも情動に訴えかける対策であるといえる(ディスカッションで出された意見では、施行者が労力や金銭を使う量と、利用者の情動に訴えかける量は比例するとのことである)。さらに、高校生、大学生、一般町民数十名を対象にディスカッションで挙げられた対策案が施行されればマナーを守るかどうかをヒアリング形式で問うたところ、守ると思う、守らざるを得ないと思うとの回答者が殆どを占めた。「言ってもわからない人々」に対するマナー向上策の可能性を見出すことができたといえる。施策および検証を実行することが、現時点の課題である。